将軍たちの列伝

今鷹　眞

『史記』において、標題を附した列伝（刺客・循吏・酷吏等）に登場する人物が、共通のテーマによって描かれ、類似の表現を用いられることは、杉山寛行氏「刺客列傳を讀む－主題と變奏」等の論文によって明らかにされている。しかし、もし異なった列伝に置かれている同じような地位にある人物（例えば宰相・王族・外戚・策士等）の場合どうであろうか。描き方・表現等に類似性がないであろうか。今、古代から武帝期までの将軍たちの伝記をとりあげ、検討してみたい。

将軍たちのうち最初に登場するのは、列伝の第四巻にある司馬穰苴である。司馬穰苴は、管仲・晏嬰の伝記が第二巻に置かれ秀れた宰相の典型を示しているように、有能な将軍の典型を示している。司馬穰苴を基本として彼とどれだけの差異があるかが、以後の将軍たちの価値を決定するかのようである。従って司馬穰苴についてその構成と内容を考える。

「司馬穰苴列伝」は七段に分けられる。

第一段は、「司馬穰苴者、田完之苗裔也。」と簡単に穰苴が陳より斉に亡命した田完の子孫であることを記し、直ちに第二段に入る。

第二段は、斉の景公の時代、侵入した晋と燕に敗れ心配する景公に晏嬰が穰苴を推薦し、気にいられた穰苴が将軍にとりたてられたことを記す。

第三段は、燕・晋の軍を防ぐ為に穰苴が兵を将いて出発する直前の話である。抜擢されたがまだ権威が確立していないことを理由に、景公の寵臣で国から尊重されている人物を軍の目付（監）として派遣することを穰苴は要請し、荘賈の同行を許される。翌日正午に荘賈と軍門で会う「約」をとりかわした穰苴は、「約」に反して夕方に出て来た荘賈を斬り、更に景公の派遣

した荘賈赦免の使者が軍中で馬を馳せたことを咎めて処罰する。穰苴は荘賈の約束違反を予測し、彼を斬ることによって将としての自らの権威をうち立てようとした。

① 穰苴先馳至軍、立表下漏待賈。

の記事がそのことを示す。荘賈が正午になっても現れないのをみた穰苴の行為を、

② 入行軍勒兵、申明約束。約束既定。

と記し、軍を動かす場合に規約が重要であることを示す。遅れてきた荘賈を責めた語、

③ 將受命之日則忘其家、臨軍約束則忘其親、援枹鼓之急則忘其身。

は将としての心得を説くと同時に、「約束」の重要さをもいうものである。かくて荘賈を斬りみせしめとする。

④ 於是遂斬荘賈以徇三軍。

荘賈の要請を受けた景公の使者が軍中に馳せ入ったのに対して、穰苴は

⑤ 將在軍、君令有所不受。

とはねつけ、軍中を馳せた使者の罪を、

⑥ 軍中不馳、今使者馳、云何。

と、軍正に訊ね、斬刑に当たるとの答を引き出すと、君の使者は殺すわけにはいかぬといい、

⑦ 乃斬其僕・車之左駙・馬之左驂、以徇三軍。

という処置をとり、出発する。

第四段は、士卒に対する穰苴の態度である。

⑧ 士卒次舍、井竈飲食、問疾醫藥、身自拊循之、悉取將軍之資糧享士卒、身與士卒平分糧食、最比其羸弱者。三日而後勒兵、病者皆求行、爭奮出爲之赴戰。

士卒をかあいがり、自分と平等な扱いをし、その結果、士卒が奮い起つことを記す。

第五段は、穰苴の士卒に対する態度を聞き知った晋と燕の軍が引き上げ、追撃して領土を取り戻し、凱旋する話である。国都に入る前に、

⑨ 釋兵旅、解約束、誓盟而後入邑。

と述べるのは軍の礼式を示すが、「解約束」は②の「申明約束」を受けたもので、軍を出動する時、時宜にあった特別なとりきめを行い、それを守ることが要請されることを示すものである。

第六段は、穰苴が尊貴な身分（大司馬）となり、田氏が斉で勢力を得たのをみて、鮑氏等の讒言がなされ、穰苴は退けられた後病死することを記す。

第七段は、穰苴の死後、田氏が反対派を滅ぼして国

を奪い、穰苴の兵法を尊重して諸侯を屈服せしめ、威王の時代、穰苴の兵法を含めた『司馬穰苴兵法』が編纂されたことを記す。

以上が司馬穰苴の伝の大要である。そこに示されている将として重要なことは、

一、君主の容喙をも許さぬ威権の確立。

二、家・親・わが身を省みぬ態度。

三、士卒と苦楽を共にし、士卒より信頼されること。

の三点である。以後の将軍たちの伝にはこれらのことに触れた記事が多い。特に三についての記事が目につく。

司馬穰苴の伝の直ぐ後に置かれているのが「孫子呉起列伝第五」であるが、彼らの伝は司馬穰苴との類似が目立つ。この伝には孫武・孫臏・呉起の三人が記載されている。まず孫武をみてみよう。

孫武の伝は彼の才能を示す唯一の話だけでできあがっている。その話は司馬穰苴の伝の第三段の話を髣髴させるものである。『孫子十三篇』を見た呉王闔廬は宮女を使って兵法を試みることを要請する。孫武は百八十人の宮女を二隊に分け、呉王の寵姫をそれぞれの隊長に任命した後、前後左右の動きについてのとりきめ（約束）を行う。

約束既布、乃設鈇鉞、即三令五申之。

違反すれば刑罰に処すことを示し、とりきめを徹底してから、太鼓を打って右の指示を与える。しかし宮女たちは大笑いするだけで指示に従わない。孫武は

約束不明、申令不熟、將之罪也。

といい、復び三令五申してから太鼓を打ち左の指示を与える。またも大笑いするだけの宮女たちに対し、隊長二人を斬ってみせしめにすることによって、思いどおり指揮できるようになる。ここの「約束不明」の語は②の表現と酷似する。呉王が二人の寵姫を殺されそうになって慌てて使者を派遣する点も、「司馬穰苴伝」において斉の景公が荘賈赦免の使者を派遣するのと同じであり、使者に対する孫武の言葉、

將在軍、君命有所不受。

も⑤とほとんど同じである。因に『孫子』九変では、「將受命於君、君命有所不受」とほぼ同じ文が載っている。更に、

遂斬隊長二人以徇。

も④⑦、特に④と対応する。

ただ、危急存亡の機にあって驕慢な寵臣を斬る司馬穰苴と、箸が転んでもおかしい年頃のお遊び気分の若い女性を刑罰に処するのとは同じでない。孫武の場合、

宮女を犠牲にして自分の能をひけらかそうとするいやらしさを感じるのだが、元の戴表元は逆に司馬穰苴の方を厳しく指弾する。

或問戴子曰、子於田穰苴之斬莊賈、嘗甚而非之。於孫子之斬呉王美人也、不尤甚乎。曰、其迹似、其情非也。穰苴之將兵、苟惡人之監己、不如勿請。既請而從之、不待令而誅之、是欲借莊賈以威齊也。呉王以美人試武、武受而教之、再三不從、而後誅之、則是欲售術於呉耳。然儒者多言孫武治兵無驗。吾併疑試宮人非事實。太史公録穰苴事、以所聞適相類、故牽聯書之歟。

（剡源戴先生文集巻之二十二、史論、読孫武伝）

この議論は同じ「史論」にある「読司馬穰苴伝」を受けたものである。戴表元はいう、穰苴が寵臣の派遣を自から要請しながら、期限違反にかこつけて誅殺したのは、君主をないがしろにし、斉に対して自己の権威を示そうとしたもので、田氏の斉国乗っとりは穰苴から始まる、と。彼は、

太史公爲之論次、以爲之傳、非賢之也。

とまでいう。「読孫武伝」は、孫武から宮女を要請したのではないこと、再三にわたって指示を徹底させようとしたことを根拠に単に技術を示そうとしたに過ぎないとし、更には宮人の話は事実でなく穰苴と類似した話なのでその関連で記載したと考える。この戴表元の論は、君主権力を絶対視する時代の考えを端的に示すもので、武帝の将衛青の専権を避けた態度を「人臣の礼を失わなかった」として評価する（読司馬穰苴伝）のと規を一にする。戴表元の説の当否はともかくとして、司馬穰苴と孫武の話が類似し、両者の話が重ねあわされて読まれていたことを示すものである。

次に孫臏であるが、彼は両足切断の刑にあい、将軍としては活躍できず、その伝も策士ぶりを伝えるものである。従ってここでは省略する。

呉起は目的の為には手段を択ばぬ残忍非情の人間として描かれる。魏の文侯に仕えようとした時、文侯は李克に呉起がどういう人物か質問する。

起貪而好色。然用兵、司馬穰苴不能過也。

右の言葉によって、文侯は将に起用するのだが、注目すべきは、司馬穰苴が呉起の能力を示す為に引きあいに出されていることである。将として兵を用いる場合、まず司馬穰苴の名が思い浮かばれることを示すものといえよう。続いて彼の将としてのあり方を述べる。

起之爲將、與士卒最下者同衣食、臥不設席、行不騎乘。親裹贏糧、與士卒分勞苦。卒有病疽者、起

爲吮之。卒母聞而哭之。人曰、子、卒也。而將軍自吮其疽。何哭爲。母曰、非然也。往年吳公吮其父。其父戰不旋踵、遂死於敵。吳公今又吮子。妾不知其死所矣。是以哭之。

この部分は「司馬穰苴伝」の⑧に対応するものだが、二つに分けられる。前半は士卒に対する態度を一般論として説明し、後半は士卒のおできを吮ってやるという具体的行為を述べる。前半について表現と内容が司馬穰苴の⑧と類似していることが注目される。後半は士卒に対する思いやりが極端な形で示され、しかも親子二代にわたって同じことがなされているとすると、それが例外でなかったことを知らされる。

呉起の伝において将軍としての能力を示すのは上の記事と二、三の戦果だけであって、やがて讒言によって破滅する。

呉起以後の名将たちについては、士卒と苦楽を共にする記事が数多くみられる。司馬穰苴の第三段で描く将としての権威を確立する話はなくなる。おそらくその必要がないのであろう。すでに実績を積んでいる人物か、世族・外戚等の身分を有する人物か、あるいは君主の任命だけで充分な時代になっているのか、いずれかのケースとなろう。韓信が高祖によって大将軍に任じられた時、壇を築いて儀式を行っているのが、権威確立の為に特別なことが行われた数少ない例の一つである。

士卒と苦楽を共にするかどうかが、将の能力を判断する基準となっているのが、趙奢・趙括父子の場合である。趙の孝成王が名将廉頗に代って趙括を起用したことに対して、奢の妻であり括の母である婦人は次のようにいう。

其母上書言於王曰、括不可使將。王曰、何以。對曰、始妾事其父。時爲將。身所奉飯飲而進食者以十數、所友者以百數。大王及宗室所賞賜者、盡以予軍吏士大夫。受命之日、不問家事。今括一旦爲將、東向而朝、軍吏無敢仰視之者。王所賜金帛、歸藏於家、而日視便利田宅可買者買之。王以爲何如其父。父子異心、願王勿遣。

部下に対して謙虚であり、賞賜を全て軍吏士大夫に与え、命を受ければ家事を問わない父の奢と、高圧的な態度で部下に接し、賜与は全て家にしまいこみ、毎日財産を増すことを考える子の括と、二人の差は戦争における勝敗という結果となって現れる。

同じく趙の北境の良将だった李牧についても、

以便宜置吏、市租皆輸入莫府、爲士卒費。日擊數

牛饗士、習射騎、謹烽火、多間諜、厚遇戰士。

と士卒に対する好遇を示す。以上の趙奢・趙括父子と李牧の記事は「廉頗藺相如列伝」に見える。

秦の名将では、王翦が楚を討った時のことを記して、

王翦日休士洗沐、而善飲食撫循之、親與士卒同食。

という。司馬穰苴の場合とよく似た表現である。

『史記』に登場する名将たちには、不幸がつきまとうのが常である。その名声や能力が君主の猜疑心を惹き起す為である。白起・蒙恬両名将の最後を描く記事は驚くほどよく似ている。

武安君（白起）引劒將自剄曰、我何罪于天、而至此哉。良久曰、我固當死。長平之戰、趙卒降者、數十萬人、我詐而盡阬之。是足以死。遂自殺。

（白起列伝）

蒙恬喟然太息曰、我何罪於天、無過而死乎。良久徐曰、恬罪固當死矣。起臨洮、屬之遼東、城塹萬餘里。此其中不能無絶地脈哉。此乃恬之罪也。乃吞藥自殺。

（蒙恬列伝）

自殺を命じられ、むりやり納得するその理由が異なるだけである。これらの不幸を避ける為に、将軍も君主向けに特別な配慮をしなければならなくなる。王翦が楚を攻撃する為に六十萬の大軍を率いて出陣した時、美田宅園池を請い、その後五度にわたって同じ要請を繰り返したのは、始皇帝の猜疑を避ける目的であった。これは蕭何が漢の高祖に対して行った手段でもあり、そのおかげで王翦も蕭何も死を免れた。

漢代に入ると、司馬穰苴的な将軍は不幸に陥入り、反対の態度をとる将軍は栄誉を享受することが明瞭となる。前者の代表は周亜夫・李広であり、後者の代表は衛青・霍去病である。

周亜夫は匈奴が大挙して侵入したとき、長安の東（覇上）・北（棘門）・西（細柳）の三地に首都防衛軍が駐屯したが、その一つ細柳の軍を指揮した。文帝は順次三軍を慰労し、最後に周亜夫の軍を訪れた時のことである。

天子先驅至、不得入。先驅曰、天子且至。軍門都尉曰、將軍令曰、軍中聞將軍令、不聞天子之詔。居無何、上至、又不得入。於是上乃使使持節詔將軍、吾欲入勞軍。亞夫乃傳言開壁門。壁門士吏謂從屬車騎曰、將軍約、軍中不得驅馳。於是天子乃按轡徐行至營。將軍亞夫持兵揖曰、介冑之士、不拜。謂以軍禮見。天子爲動、改容式車。使人稱謝。皇帝敬勞將軍。成禮而去。既出軍門。羣臣皆驚。文帝曰、嗟乎、此眞將軍矣。曩者覇上・棘門軍、

若兒戲耳。其將固可襲而虜也。至於亞夫、可得而犯邪。稱善者久之。　（絳侯周勃世家 坿）

軍門都尉の言「軍中聞將軍令、不聞天子之詔」は、司馬穰苴の言「將在軍、君令有所不受」（⑤）と孫武の言「將在軍、君命有所不受」に対応するものであり、精神は同じである。壁門士吏の言「將軍約、軍中不得驅馳」は司馬穰苴が軍正に向っていった言「軍中不馳」（⑥）に対応するものである。しかも周亜夫の部下の発言であり、彼の指令が軍中に徹底していて天子の行幸によっても変更されなかったことからも、将軍としての権威も完全に確立していたことを示している。文帝は「此眞將軍矣」と感嘆し評価するが、周亜夫のとった態度は司馬穰苴と同じであった。司馬遷は論賛において、

亞夫之用兵、持威重、執堅刃（考證、刃讀爲忍）穰苴曷有加焉。

と述べるのは、司馬穰苴を意識しながら周亜夫の伝記が書かれたことを示すであろう。

李広については、

廣廉。得賞賜輒分其麾下。飲食與士共之。終廣之身、爲二千石、四十餘年、家無餘財。終不言家産事。廣之將兵、乏絶之處、見水、士卒不盡飲、廣不近水。士卒不盡食、廣不嘗食。寛緩不苛。士以此愛樂爲用。

と二度にわたって、士卒を大切にする彼の態度が記されている。しかし文帝が、

惜乎、子不遇時。如令子當高帝時、萬戸侯豈足道哉。　（以上　李將軍列伝）

と評したように、時代にとり残された将軍であった。文帝の評は李広の武勇についていったものだが、将軍としての一生をも暗示しているといってよいであろう。文帝の評価を受けた二人の将軍のうち、周亜夫は景帝の時代に獄中で餓死し、李広は武帝の時代に辺地で自殺する。

武帝の時代、赫々たる武勲をあげ、帝の信頼を得、将軍として最高の地位についたのは、いうまでもなく大将軍衛青と驃騎将軍霍去病の二人である。この二人の将軍としてのあり方は、かっての名将たちと全く異なる。

衛青は、匈奴との戦闘に敗れた部下を処断して「将軍の威を明らかにする」ことを周覇等に要請された時、次のように答えた。

青幸得以肺腑待罪行閒、不患無威。而覇説我以明

威、甚失臣意。且使臣職雖當斬將、以臣之尊寵、而不敢自擅專誅於境外、而具歸天子、天子自裁之。

於是以見爲人臣不敢專權。不亦可乎。

外戚としての恩寵を受けている衛青にとって威権を立てる必要はなかっただけでなく、恩寵だけを頼りにする彼にとって専権などはもっての外だった。「君令有所不受」どころか処罰の権限すら放棄しようとする。司馬遷が、

大將軍爲人仁善退讓、以和柔自媚於上。然天下未有稱也。

と述べるのは、痛烈な批判の意を示すものといってよいであろう。

霍去病については、一見古代の名将を思わす記事が載せられている。武帝が彼の為に邸宅を作ってやりそれを見せた時、彼は

匈奴未滅、無以家爲也。

と答え、その結果、

由此上益重愛之。

と記している。しかしこの後に続けて、

然少而侍中。貴不省士。其從軍、天子爲遣太官、齎數十乘。既還、重車餘弃粱肉、而士有飢者。其在塞外、卒乏糧、或不能自振。而驃騎尚穿域蹋鞠。事多此類。

と述べるのを見れば、家など必要ないとする霍去病の発言は、若い時から高貴な身分となり、天子の恩寵を存分に受けている人間の心理を現すものとして、割り引いて考えなければなるまい。従軍時に太官を派遣してもたらされる物資を断る意志は毛頭なく、その特権を享受しているのである。帰還時に粱肉を棄るほどでありながらも、士卒は餓え、それを省ることなく蹋鞠に興ずる。「事多此類」はやはり司馬遷の厳しい批判である。

更に司馬遷はこの「衛将軍驃騎列伝」の論賛において、次のようにいう。

太史公曰、蘇建語余曰、吾嘗責大將軍尊重、而天下之堅士大夫毋稱焉。願將軍觀古名將所招選擇賢者、勉之哉。大將軍謝曰、自魏其・武安之厚賓客、天子常切齒。彼親附士大夫、招賢絀不肖者、人主之柄也。人臣奉法遵而已。何與招士。驃騎亦放此意。其爲將如此。

衛青も霍去病も天子の意向のみを気にかけていた。「古名將」にならうことは自己の身を危険に陥入れることであった。「其爲將如此」という最後の言は、司馬遷の冷い否定的感情がこめられているであろう。衛青

について、

天下未有稱也。

といい、この論賛で蘇建の語を引き

天下之賢士大夫毋稱焉。

と繰り返すが、これは李広についてその自殺を記した後、

廣軍士大夫一軍皆哭。百姓聞之、知與不知、無老壯、皆爲垂涕。

と記し、更に論賛において

及死之日、天下知與不知、皆爲盡哀。

と繰り返すのと、まさに対蹠的である。司馬遷が両列伝を相関連させながら作り上げたことを感じとれる表現である。司馬遷は「佞幸列伝」の最後において、

衛青・霍去病、亦以外戚貴幸。然頗用材能自進。

と何げなく付加するのは、彼らの本質を鋭く指摘した言といってよい。衛青も霍去病も、栄誉と恩寵に包まれて死ぬことができた。

司馬遷は将としての理想の姿をまず司馬穰苴を通して描いた。司馬穰苴の行為には、戴表元の説のように否定的な側面はないであろう。以後の将軍たちは、穰苴を規範としつつ描かれているように思われる。特にその意識が鮮明なのは孫武と周亜夫である。又、李広と衛青・霍去病の自殺と栄誉、賞賛と無視に、司馬遷の当代に対する思いがこめられているであろう。